



ATSUMA LOVERS

雪氷に覆われた軽舞地区の一角で、ビニールハウスが太陽の光を反射していました。河村農場代表の河村敏弘さんの花き栽培用のビニールハウスです。2月1日から2日ばかりでカーネーションの苗5000本を手で植えました。6月中旬の出荷を目指して今シーズンの栽培を始めた河村さんを訪ね、話を伺いました。



河村農場代表
Vol.11 かわむら としひろ
河村 敏弘さん(52歳)

「あつまの花」でマチを元気に

河村さんは、開拓期から続く農場の4代目代表。高校卒業後に家業を継ぎました。農業研修で知り合った花の市場関係者のアドバイスで、平成元年ごろから花の栽培を始めました。切り花が中心で、ビニールハウス10棟で、キクやカーネーションを育て、11月まで農協を通じて市場に出荷しています。平成18年から10年間、JAとまこまい広域花き専門部会の部長も務めたほか、40歳で北海道指

導農業士にも任命され、後継者の育成などにも力を注いでいます。「今年も、いよいよ始まったね」。優しい眼差しで苗に触れました。現在は、温度管理が大変な時期で、天候に注意するそうです。「ちょっと太陽が出たら室温は高くなるし、曇天だと寒くなります。入口を空けて外の空気を入れたり、暖房を使って温度を保ったり。こまめな温度管理に神経を使っています」と語りました。

昨年の花き市場は、コロナ禍によって結婚式などのイベント中止で低迷したそうです。「出荷先は、半分が道内で、残る半分は九州や沖縄、名古屋。本州へは、空輸していました。飛行機の減便でトラック輸送に切り替えました。輸送費はかかりましたが、町の協力や花の単価に助けられ、影響は最小限でした」と河村さん。「ワクチン接種が普及し、市場が上向きになることを願っています」と期待を込めました。

現在、花き専門部会の約20人全員が、カーネーションを栽培しているそうです。色も豊富で、鮮度が高いと市場の高評価を得ている、段ボール箱に書かれた「あつまの花」という名前が、花店にも広がっているそうです。「あつまの花」で消費者も地域も元気にしたい。それが、私の使命です」。

あなたにとっての
愛すべき厚真を投稿してください

ATSUMA LOVERS



フェイスブック
@atsumatownhokkaido



Instagram
atsumalovers

ハッシュタグ#atsumaloversをつけてフェイスブックまたはInstagramに投稿してください。